
K -消えない名前-

今雲流鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K 一消えない名前一

【Nコード】

N10120

【作者名】

今雲流鬼

【あらすじ】

孤独という名の絆で結ばれた黒猫と絵描きの物語。

原作…K／BUMP OF CHICKEN

1 通目 少年の夢

> i 1 2 2 8 0 — 1 3 1 3 <

絵…夢見月空音

作者…今雲流鬼

雪の降るその山には小さな村がある。

特別活気があるわけでもなく、産業に富んだこともなく、山には僅かな資源が眠っている程度だ。

それでも村人は幸せを感じていた。

12月に入ると、外に出たら吹雪で視界が失われる。そんな不便と凍てつく寒さが絡み合う中、1人の男の子がこの世に生を受けた。

2

男の子は山の寒さにも負けず、すくすくと育っていった。

時には母親の家事を手伝い、時には父親に連れられて採掘場にも入った。

そんな男の子の楽しみは、村に住み着く数匹の野良猫とじゃれ合うことだ。

過疎化が進む村には男の子と同じくらいの歳の子供は少なく、野良猫のほうが多いくらいだった。

少年が10歳になる誕生日、父親は絵の具セットをプレゼントした。

とても裕福な家庭とはいえず学校には通えなかったが、勉強は母親が教え、父親は必死に働き密かに誕生日資金を貯めていたのだ。

今までに見せたことのないくらい笑顔を見せて父親に抱きつく少年と、照れながら少年の髪の毛をぐしゃぐしゃと撫でる父親を見て、母親は穏やかに微笑んでいた。

小さな村の、小さな家に、確かに幸せは存在した。

それからというものの、少年は村人から貰った広告の裏紙と絵の具セットを常に持ち歩いた。

大好きな野良猫達や、大好きな村、大好きな山を飽きることなく描き続けた。

少年は絵描きとしての腕をぐんぐん上げていき、彼の”絵”は瞬く間に村中に広まった。

少年が17歳を終える頃、彼は悩んでいた。

少年は12歳の頃から父親の仕事を手伝うようになって、家族はもとより村人全員がその仕事を続けていくと思っていた。

始めは少年もそうだと思っていた。だが絵を描き始めて7年、彼の気持ちは変わり始めていた。

ある日、少年は自分の思いを彼女に相談した。付き合ってから2年を越える村人公認の彼女は、少年にとっては家族同然の仲だ。

彼女は少年の話を黙って聞き、最後にこう言った。

「私の幸せはあなたが幸せになることよ。」

彼女の優しい口調、優しい笑顔、優しい瞳は少年に勇気を与えた。

18歳の誕生日、少年は両親に自分の思いを打ち明けようとしていた。

だが口火を切ったのは父親だった。

「コレを持ってけ。」

父親は少年の目の前に茶封筒を差し出した。中にはお札が数枚、向きがきちんと揃えられている。

「絵を描きたいんだろ？ お前の気持ちくらい、とっくに分かったさ。」

父親は椅子に腰掛け、少年の顔をじっと見つめてさらに続けた。

「簡単な道じゃないぞ？」

少年は力強く拳を握りしめ、震える声で答えた。

「俺は、絵が好きだ。絵を描き続けたい、もっと上手になりたいんだ！」

父親は目を閉じてゆっくり2度頷いた。

「いつでも帰ってきていいんだからね。」

子供の頃に見たそれと何ら変わらない笑顔のまま、母親は少年の髪を優しく撫でた。

別れを前にして、零れる涙の数だけ少年は改めて幸せを感じていた。

「行っちゃったな……。」

小さくなっていく背中を見ながら父親は呟いた。

「これで良かったの？」

母親は夫の顔を見ながら言った。

「あいつには何もしてやれなかったから……。せめて好きなことくらいさせてやりてーんだよ。」

父親は後ろを向き、木に隠れる彼女に言った。

「ごめんな、嬢ちゃん。」

彼女は姿を現し、濡れる顔を必死に笑顔にして言った。

「あの人は優しい人だから、いつも自分のことは後回しにして……。だから私に打ち明けてくれた時、嬉しかったんです。やっと……。自分のやりたいことを見つけられたんだ……。って。だから……。これで良いんです。」

彼女は小さくお辞儀をしてどこかへ駆けて行った。

大きな街に出た絵描きだったが、その生活は苦難が続いた。

まず住みかを見つけないといけないのだ。いくつもの不動産屋を巡り、やっと見つけた破格の低賃金賃貸の物件。

とにかく絵を描きたいだけの絵描きには、家の広さなど今はどうでもよかったのだ。

一番重要なのは収入だった。1人で生きていくということは、その絵が売れなければならない。

男はまたまだ大海を知らなかった。

なんとか都会での生活をしていく中、いつしか絵描きは自分が絵を描く理由を見失ってしまった。

その日その日を生きていくのに必死で、絵を描く楽しさを忘れしまったのだ。

そんなある日の週末、大通りを散歩しながら物思いに更ける絵描きの前を一匹の黒猫が横切った。

2通目 孤高の黒猫

建ち並ぶレンガ造りの家々の隙間を縫って行き交う自動車と人々。都会と呼ばれるこの街に住む一家は2匹の猫を飼っていた。

茶色の毛の雄と雌はいつも仲良く遊んでいるが、飼い主の迷惑には決してならないよう振る舞っていた。

ある日、雌猫は体調を崩して倒れてしまった。

飼い主が動物病院に急ぐ間、雄猫はずっと寄り添って顔を舐め続けた。

手術室の外、椅子に腰掛ける飼い主が耳にしたのは、子猫のかすかな鳴き声だった。

雌猫は体調を崩したのではなく妊娠していたのだ。

新しく加わった家族は3匹。1匹は親と同じ茶色の毛の雄。1匹は全身真っ白い毛の雌。しかし、最後の1匹が問題を生んだ。全身真っ黒の毛の雄なのだ。

闇に溶けるその体から伸びる鍵尻尾を傲慢に威風堂々と歩く姿から、黒猫は昔から嫌われている。

その黒猫嫌いはこの飼い主達も例外ではなかった。

始めこそ親猫が可愛がるので飼っていたものの、周りの住人に気付かれてしまい、少し遠い場所に捨てることにした。

生まれながらにして嫌われた黒猫は孤独になってしまった。

黒猫は石を投げられ、忌み嫌われた存在でありながらも生き続けた。

いつしか孤独に慣れ、そして自ら望むようになってしまった。

誰かを思いやることも、誰かと共に過ごすことも煩わしくなってしまうた。

そんな孤独と一体化してしまった黒猫はある日の週末、大通りを優雅に歩いていた。

その時、後ろから近づく人間の気配を察知した。

3通目 絵描きとの誓い

太陽は水平線に沈み、暗闇を三日月が昇り始めている。

週末の大通りを威風堂々と歩く黒猫の姿は、絵描きに故郷の野良猫を思い出させた。

絵描きは何かに駆られたように黒猫を抱き上げた。

「今晚は 素敵なおチビさん 僕らよく似てる」

驚いた猫は絵描きの腕の中でもがいた。必死で引っ掻いて、孤独という名の逃げ道に向かって走った。

飼い主にすら捨てられた自分を愛してくれる人間なんていない。

猫は走った。生まれて初めての優しさが、温もりがまだ信じられなくて。

しかしどれだけ黒猫が逃げてても変わり者の絵描きはついてきた。

走り疲れた猫は、ついに絵描きの腕の中に収まった。その温もりが思った以上に居心地の良いものだったらしく、黒猫は急に大人しくなった。

とりあえず絵描きは猫を抱き抱えながら家路についた。

家につき、小皿にミルクを注いで猫に与え、しばらく観察を続ける絵描き。

しかし彼は気付いた。勢いで連れてきてしまったものの、自分の暮らしかで精一杯なのに果たして猫を飼う余裕があるのか。

そんな事を考えながらも、絵描きは猫の姿に癒され自然と鉛筆を握んでいた。

絵描きが鉛筆を握んだと同時に、黒猫はその動作の全てを停止させた。

誰に教わったわけでもなく、本能的にそうすべきだと思ったのだ。

部屋には鉛筆が紙に擦れる音だけが響いている。

長い時間を一瞬だと感じられるほどにその絵は自然と出来上がった。

畳に敷かれたバスタオルの上に、後ろ足は畳まれ前足は床と垂直に伸び、少し曲がった背筋とピンと跳ねた耳。その身体全てが黒に包まれている。

白い画用紙に描かれた一匹の猫と、目の前で再びミルクを舐める猫を見比べ、絵描きは満足したようにその絵を部屋の一番目立つ位置に飾った。

その時絵描きはハツとした。大好きな猫を描きながら、村を飛び出してまで絵を描きたかった気持ちを思い出したのだ。

それを思い出してくれたのは、自分を重ね合わせた”黒猫”だった。

それから絵描きと黒猫は長い時間を共に過ごし、2度目の冬を迎えた。

絵描きは友達にやっと名前を与えた。

「黒き幸^{さち} ホーリーナイト」

彼のスケッチブックはほとんど黒ずくめで、もちろんそんな絵は売れない。

それでも彼は今、とても幸せだった。

黒猫も初めての友達にくっついて甘えた。

がある日、貧しい生活で名付け親はついに倒れてしまった。

なんとか力を振り絞って最後の手紙を書くと彼はこう言った。

「走って 走って こいつを届けてくれ 夢を見て 飛び出した

僕の帰りを待つ恋人へ」

黒猫は絵描きの顔を舐めた。でも彼が猫の頭を撫でることは二度となかった。

「不吉な黒猫の絵など売れないがそれでもアンタは俺だけ描いたそれ故アンタは冷たくなった 手紙は確かに受け取った」

黒猫は初めての友達に別れを告げ、雪の降る山を目指した。

4通目 消えない名前

空を覆う漆黒のカーテン。その頂点には金色の三日月が輝いている。

気温がどんどん下がっていく暗闇の世界、雪の降る山道を黒猫は走っていた。今は亡き親友との約束をその口に銜えながら。降り積もっていく雪に足をとられ、黒猫は何度も転んだ。

息は切れ、毛はボロボロになっていく。

太陽が昇ると、気温が上がる変わりにどこからか子供達が姿を現す。

「見ろよ 悪魔の使者だ!」

彼を見つけると石を投げ始める子供。

黒猫はその仕打ちに耐えながら必死に走った。

「何とでも呼ぶがいいさ! 俺には消えない名前があるから!」

黒猫は月のように輝くその瞳から溢れようとする涙を堪えながら、親友の呼び声を思い出した。

「ホーリーナイト」

親友は呼んでくれた。優しさも温もりも全て詰め込んで、聖なる夜と呼んでくれた。

「忌み嫌われた俺にも 意味があるとするならば この日のために生まれてきたんだろう どこまでも走るよ!」

走り続けて数日、黒猫は親友の故郷に辿り着いた。初めて見る親友の生まれ育った村。

白銀の世界に映し出された、都会とは全てが違う景色。

黒猫はさらに最後の力を尽くした。恋人の家までは後少しだ。走った。

転んだ。

既に満身創痍だ。

立ち上がる間もなく、襲い来る罵声と暴力。

「負けるか！ 俺はホーリーナイト！」

黒猫は自分に言い聞かせる。千切れそうな手足を引きずり、なおも走った。

「見つけた！ この家だ！」

倒れる直前まで、親友が何度も話してくれた彼の恋人。

間違えてなどいない、間違えるはずがない、絶対にこの家だ。

「ガタッ！」

不意に玄関から音がした。雪とは違う何かが扉にぶつかるような音だ。

彼女は鍋の火を止めて音の正体を確かめに行った。

慎重に扉を開くと、地面に伏せる一匹の猫を見つけた。

血だらけとなり、所々抜け落ちた毛が痛々しい。

彼女は猫が口に加えているものに気付き、そっと抜き取った。

手紙だ。

彼女は猫を抱き抱えてリビングに戻った。

椅子につくと、雪で濡れ、破れかけた手紙に目をやる。

最初の一行を読み始めた時、彼女の瞳からは直ぐには自分でも気付かないほど、自然と涙が溢れていた。

字を見れば分かる。

1日たりとも想わない日はなかった。

彼からの手紙だ。

君がこの手紙を読む頃には、僕はきつともうこの世にはいないだろう。

僕のがままを聞いてくれた君のこと、父さん、母さん、村の皆に、本当に感謝している。

でもどうやら再び皆に会うことはできないらしい。

それでもこれだけは言える。僕は今でも絵が好きだ。

この手紙を読み終わったら、どうか僕の友達を可愛がって欲しい。
名前はホーリーナイトだ。

最後に……僕はずっと……

恋人の視界は涙で埋まってしまった。

滲む世界の中、恋人はもう動かない猫を抱えて庭に出た。

スコップで深めに穴を掘り、彼の墓を作ってやる。

大好きなあの人の名前の1つを、彼の親友の名前に付け加え、墓石を立てた。

H o l y K n i g h t ここに眠る

5通目 未来へ

雲1つない空には白い輝きが1つある。

吹き抜ける風は目に見えず、それでも確かにここにいたことを感じ、恋人は彼のいた街を歩いている。

自分の知らないあなたがここで生きていた。何を思い、何を感じ、何のために生きていたのか……。

その答えを知ることが永久にない。それでも、あなたの心の中に私がいたならそれでいい。

あなたの身体は死んだ。でも、あなたの魂はまだ私のココに生きている。

私はあなたと共に生きている。

時は流れ、ある日の午後。いつもと変わらないいつもの日常に、

1人の画家の個展が開かれた。

彼の絵を見た人々は口を揃えてこう言った。

「誰がこの絵を!？」

しかしこの問に答えられる者は1人をおいて誰もいなかった。

とある空き家を片付けている最中、その作品達は見つかった。

段ボールにいれた何枚もの絵。そのほとんどは1匹の猫を描いたものだった。

悪魔の使いと揶揄される黒い毛並み。闇夜を照らす月のような黄色い瞳。

作者不明のその作品達は、長い月日を得て人々に受け入れられた。

美術館と化したホールの一歩奥には、黒猫以外の数少ない絵があった。

恋人は泣いた。

あの日から、何があっても笑って生きていくと決めたのに、泣いてしまった。

彼の心にはちゃんと彼女がいたのだ。

恋人にとって、その絵は鏡のようだった。

この作品達を描いている人を誰も知らない。

この作品達に描かれた黒猫を誰も知らない。

それでも私だけは知っている。彼らには彼らだけの物語があった。友情が、絆があったことを。

帰り際、恋人は若い男4人組を見た。

その内の3人は黒いケースを肩にかけている。この街……いや、この時代には見慣れないものだ。

男達は黒猫を1つひとつ丁寧に見て回り、その眼に、その心に何かを焼き付けていた。

不意に恋人は背中にそよ風を感じた。

振り向くと、そこにいたはずの男達の姿は消えていた。

彼らはきつと残してくれる。

私が愛した人と、その彼が愛した猫との、小さく力強い物語を……。

>i12797—1313<

絵…夢見月空音

作者…今雲流鬼

原作…BUMP OF CHICKEN「K」

——
完

5 通目 未来へ（後書き）

この度は「K 一消えない名前」を読んいただきありがとうございました。

ご存知の通り、この作品は「BUMP OF CHICKEN」さんの「K」が題材です。

台詞のほんども使わせていただいています。

基本、二次創作というものをあまり作らない自分ですが、この「K」はそんな自分が小説として書きたくなるくらい素晴らしい一曲です。ぜひこの機会に今一度「K」を聴いていただきたいと思います！

最後に、自分の執筆力のなさで本来の「K」の素晴らしさが薄れてしまいましたら誠に申し訳ありませんでした。

f r o m . ルキ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n10120/>

K -消えない名前-

2011年2月24日23時10分発行